ライフデザイン学科への変遷と学びの視覚化の試み

Transition to the Department of Life Design and Attempts to Visualise Learning

谷口　美佳・西　晃平・森山　廣美・谷　明日香
Mika TANIGUCHI, Kohei NISHI, Hiromi MORIYAMA, and Asuka TANI

本稿は、ライフデザイン学科が令和４年度より名称変更したことを機に、ライフデザイン学科に至るまでの学科の変遷を振り返るとともに、カリキュラムポリシーを視覚化した試みについて検証することを目的としている。ライフデザイン学科は被服科や食物科の後継に位置し、昭和58年に新設された生活科学科が前身である。その後、生活ナビゲーション学科を経て、ライフデザイン学科に名称を変更している。ライフデザイン学科では地域総合科学科の考え方を取り入れた生活ナビゲーション学科のフィールド・ユニット制を基本的に引き継ぎ、より時代やニーズに沿うフィールドに構成した。フィールド・ユニット制では、８フィールドからなる多彩な科目を提供することができる一方で、各分野との関連性や学びの方向性を示すのは容易ではないため、インフォグラフィックの考え方を参考に学びの視覚化を試みた。

キーワード：学科の変遷、学びの視覚化、概念図

１．はじめに

本学は、聖徳太子が四天王寺を創建された精神に基づき、学校法人四天王寺学園によって設置された大学である。四天王寺大学短期大学部の歴史は、四天王寺大学のそれより古く、四天王寺学園女子短期大学という名で開設された。開設後の短期大学部における各学科の変遷について、西が作成した年表を図１に示す。設置された学科は、保健科（昭和32年－平成21年）に始まり、被服科（昭和33年－61年）、食物科（昭和37年－61年）であった。その後、昭和42年に四天王寺女子短期大学と改称されると同時に、保育科（昭和42年－現在）が増設され、４年制大学である四天王寺女子大学が開設、文学部が設置された。昭和56年には、四天王寺国際仏教大学と同短期大学部に改称され、昭和58年、短期大学部には英語科（昭和58年－平成21年）と生活科学科（昭和58年－平成21年）が新たに設置され、３年間（昭和58年－61年）は６学科体制の最盛期となった。その後、被服科や食物科が廃止に至るが、昭和58年に開設された生活科学科は被服科や食物科を引き継ぐものとなった。生活科学科は、平成22年に生活ナビゲーション学科と名称を改め、令和４年にライフデザイン学科と更なる名称変更とともに教育内容を見直し、進化を続けている。

本稿では、令和４年に生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻からライフデザイン学科に名称変更した経緯と、名称変更に際して、見直しとともに改良を重ねたカリキュラムポリシー

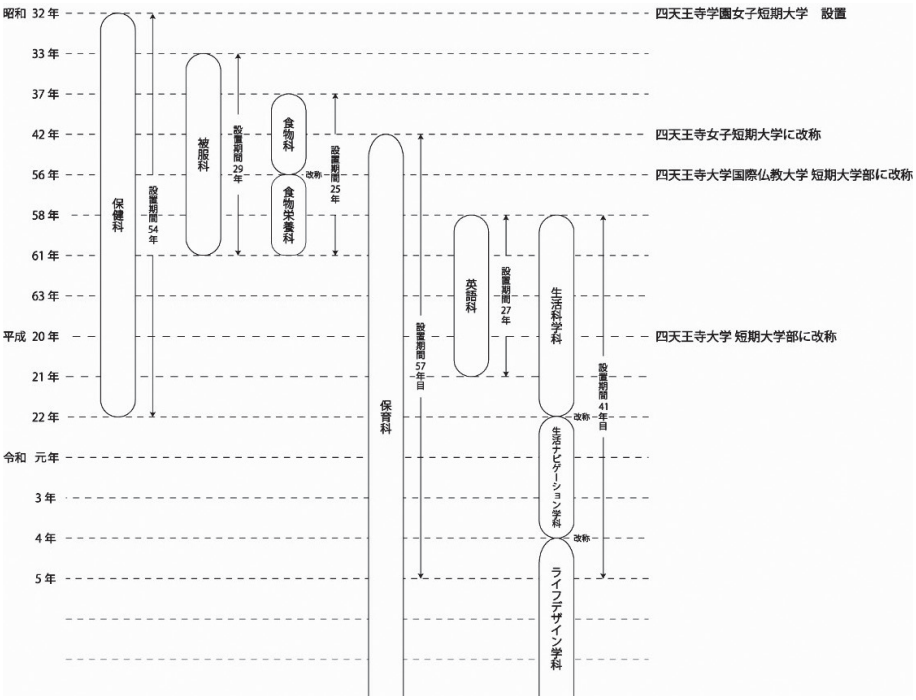

図１　短期大学部における各学科の変遷

を視覚化した試みについてまとめる。

２．生活ナビゲーション学科からライフデザイン学科へ

（１）生活ナビゲーション学科の学び

生活ナビゲーション学科では、生活科学科より改称する際に、短期大学における地域総合科学科の考え方を取り入れたフィールド・ユニット制を導入した。文科省によると、地域総合科学科は、短期大学において特定の学問領域に限定せず、地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的とし、特色としては①多彩な科目とコース展開②科目・コースの柔軟な選択③多様な履修形態④社会人の積極的な受け入れ⑤第三者機関による適格認定が掲げられている[1)]。また、第三者機関と位置付けられている財団法人短期大学基準協会によると、地域総合科学科はアメリカのコミュニティ・カレッジを参考に、適格認定された学科で平成15年度より学生受け入れが開始されたと述べられている[2)]。このような地域総合科学科の考え方の一部を導入し、本学科では、生活科学科における衣・食・住コースを「ファッション」、「フード」、「インテリア」と改め、さらに「ビジネス」、「情報」、「健康・ビューティ」、「デザイン」、「観光・カルチャー」の分野を新たに加え８フィールドとし、それらを構成する多彩な科目（ユニット）を学生が柔軟に選択できるように構築した。キャッチフレーズに「なりたい自分を探そう！」と掲げ、学科運営を進めた結果、毎年、一定の定員充足率を満たすことができた。しかし、今後迫り来る

少子化の煽りを目前に、同じ生活ナビゲーション学科のもう一つの専攻であるライフケア専攻の廃止が決まり、学科名称の変更とともに教育内容の見直しを図ることとなった。

（2）ライフデザイン学科の学び

2022年、生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻のフィールド・ユニット制の学びを基本的に引き継ぎ、ライフデザイン学科が始動した。「ライフデザイン」という言葉は、1980年代中頃から文献に登場するようになったが、言葉として明確な定義づけをしているものは少なく、筆者によってその意味するところは多様である。宮田・小澤は、ライフデザインとは「私たちを取り巻く環境変化の中で、一人ひとりが人間らしい、心豊かな生活を送ることができ、そしてそのような生活が、限りある地球環境の中で世代を超えて永続性を持つことができるように、個人が社会とのつながりにおいて、生活や人生を主体的に構想し、設計（デザイン）すること」と述べている[3)]。Society5.0に向かう社会変化の中で、本学科の「ライフデザイン」を確立するために、先ずフィールド名称や内容については時代の流れやニーズに則したものに変更する必要があった。その内容は次のとおりである。「情報・ビジネス」を「ビジネス・ICT」とするとともに「医療事務」を独立させ、「デザイン」を「インテリア」に統合し、「健康・ビューティ」は内容をさらに充実させて「トータルビューティ」と発展させた。「観光」は語学に加え異文化理解を含めた「グローバルカルチャー」とし、従来からの「フード」、「ファッション」、「ブライダル」と合わせ８フィールドとした。

中教審は、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、高等教育がめざすべき姿として、「専攻分野についての専門性を有するだけではなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力の基盤の上に、幅広い教養を身につけ、（中略）文理横断的にこうした知識、スキル、能力を身に付けることこそが、社会における課題の発見とそれを解決するための学問の成果の社会実装を推進する」ことや学修者の「主体的な学び」の質を高めるシステム構築の重要性について触れている[4)]。生活ナビゲーション学科では、各フィールドにおける学びをつなげる学外活動[5)]や地域の特産品を題材にしたプロジェクト型学習[6)]を試み、その成果として学生の自己肯定感の向上につながることを確認することができた。さらに、このような各フィールドにおける学びを発展させ、社会との接点をもつ経験は、卒業後の人生において実践力につながるジェネリックスキルになりゆくものと考える。そこで、ライフデザイン学科に名称変更するにあたり、学生個々人の資格取得を含めた知識・技能の習得により深まるスペシャリストの育成に加え、社会の中で活用される実践的体験型の課題解決型学習を通したジェネラリストの育成を明確に示した。この両スキルが共鳴しながら、学生の主体的な学びを促し、社会で実践力として働く素養を育む教育をめざすことにした。こうした方針を蝶の羽で表現したものを図２に示す。ジェネラリストとスペ

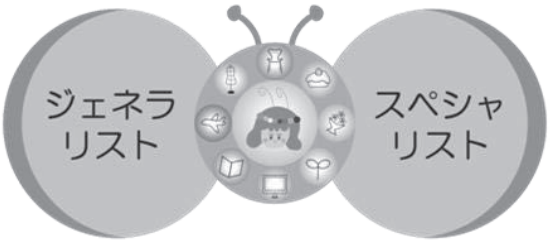

図２　ジェネラリストとスペシャリストの育成モデル

シャリストで表現された両羽は相互にバランスを取ることにより飛躍することを模擬したものである。

３．学びの視覚化への試み

（１）学科オリジナルキャラクターの創生

①　学科オリジナルキャラクターの制作

2012年12月12日に学科オリジナルキャラクター「セイラちゃん」が誕生した。これは、学科のブランディングの一環であり、大学内外における学科の認知度を高めること、学生が学科に愛着を深めることを目的に実施したものである。「セイラちゃん」の名前は、生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻の頭文字を略したものであり、学内で本専攻を示す通称名（生ラ：セイラ）が由来である。キャタクター制作の手段として、当時の生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻の１、２年生に学科オリジナルキャラクターの募集を呼びかけ、ラフスケッチの提出を促した。その中から優秀作品を数点選出するとともに、制作実行委員（学生２名、教員１名）を組織した。制作実行委員の手により優秀賞の作品から複数点のデザイン要素を抜き取り、組み合わせたラフスケッチを図３に示す。

図３
学科オリジナルキャラクター
誕生前のラフスケッチ

さらに、それをIllustratorによりトレースしデジタル化したものが図４である。

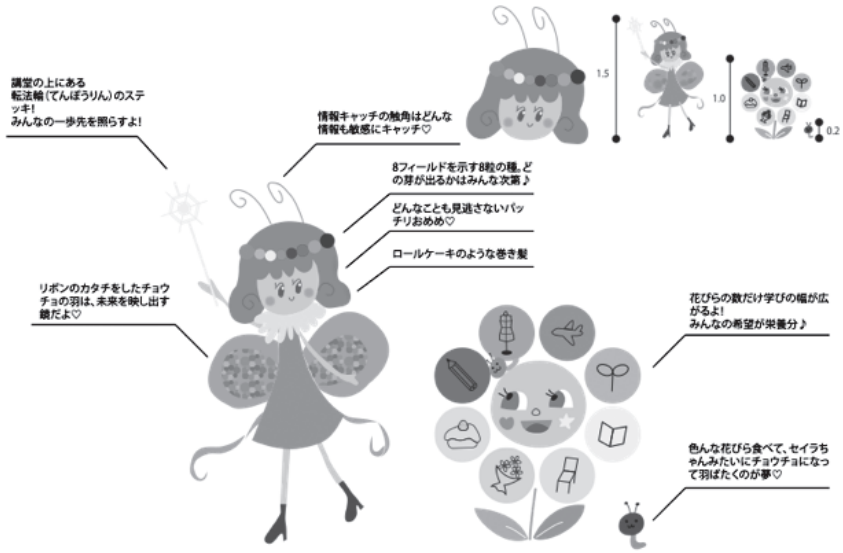

図４　学科オリジナルキャラクターのデザイン

制作を進める中で、キャラクターを１体に絞ることは難しく、セイラちゃんに加え、セイラちゃんの学びをサポートするお花やセイラちゃんの成長過程を示すもぐりん（セイラちゃんはもぐりんの進化形）が結成された。もぐりんは、入学時の新入生を表現しており、在学中に８フィールドの学びを示す花びらを少しずつ習得（もぐもぐ）していくことで、蝶の羽をもつセイラちゃんに成長するというストーリーを設定した。

② 学科オリジナルキャラクターの更新

2022年、ライフデザイン学科に名称変更されると同時に、セイラちゃん誕生10周年を記念し、ライフデザイン学科１年生の必修科目「ライフデザイン概論」においてセイラちゃんのワンピースのデザイン募集を行なった。第２回の授業で大学内の施設を知る目的で実施したキャンパスツアーの時間を用いて、学生は大学キャンパス内で気に入った風景写真をグループごとに探し撮影した。その際、学生はケント紙に印刷されたセイラちゃんのワンピース部分が切り抜かれたものを手に持ち、ケント紙越しに見える風景をスマートフォンで撮影した。収集した写真データからGoogle formsを用いて学生投票を行い、投票数の多かった風景写真を用いたドレスを図５に示す。さらに、図５の風景写真をIllustratorによりデジタル化し、ワンピースのデザインに展開したものを図６に示す。この取り組みは、普段の生活では見過ごすような物へ、意識的に注目をすることによる新たな発見や観察力の向上を期待したものである。また、学生生活では様々な物・事に興味を示してもらいたいという学科教員の想いが反映されている。10周年のワンピースデザインは、周年企画で新たに発足したSNSや学科ブログ、およびオープンキャンパスでのグッズ等に幅広く展開をした。

図５　学生が撮影した学内風景写真

図６　学内風景写真からデジタル化した画像

（２）学科の学びを表す概念図の制作

ライフデザイン学科では、フィールド･ユニット制を導入している。そのため、学びのフィールドは８分野と多岐にわたり、各分野との関連性や学びの方向性を示すのは容易ではない。そこで、多大な情報をわかりやすく、人に伝わるかたちで視覚化するためにインフォグラフィックという手法を取り入れ、学びを示す概念図の作成を試みた。インフォグラフィックとは、何ページにもわたる文章、膨大なデータやグラフといった情報に目を通すのには時間がかかる上に、見るひとの解釈によっては価値が見出せない場合もあるため、一見バラバラのデータをビジュアルの力で結びつきを明確にする、言わば「情報の地図」のことを意味する[7)]。これまでに学生の学びの手がかりや、方向性を導く手段として試みた学びの視覚化の試みを以下に報告する。

① 生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻の学びを表す概念図（ライフデザインツリー）の創生

生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻の学びを表す概念図（ライフデザインツリー）は、2012年に生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻のフィールド・ユニット制を表現するツールとして考案された（図７）。

ライフデザインツリーでは、本学の建学の理念を土壌に、ツリーの成育を学生の２年間の成長に見立てたものである。学生の成長の軸となる初年次教育とキャリア教育を幹とし、８フィールドの学びの展開を大きく茂った枝に実る果実として表現した。各フィールドの学びの関連性は果実の位置や距離で表現し、学びの多様性は色で示した。さらには、この樹木を取り巻く社会（空気）で活躍できるビジネスパーソンを育成する学びの目的も表している。ツリーが成育し、実が成熟していく様子やその多様性は、８つのフィールド･ユニットにおいて様々なフィールドの学びを経験し、学期ごとにフィールドを見直しながら“なりたい自分”を探す学生生活を表している。そして、このことは、学生が卒業後も含めた個々の人生のライフイベント（大学卒業・就職・キャリア形成・転職・結婚・子育て・介護など）において、自分の能力と環境に折り合いをつけて次の人生のステージに進み、ライフプランを描いては修正を繰り返し、よりよい人生を築いていくことにつながるというキャリア教育の要素を含ませている。

図７　ライフデザインツリー

以下に、生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻のカリキュラムポリシーを示す。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻は、教育課程の編成と実施については建学の理念の土壌に育つ樹木とその実りをイメージしています。これまでに育まれた人間性と基本的生活習慣、基礎学力、社会人基礎力を基に「ライフデザインゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱ」「キャリアデザイニング」「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」を幹に、枝になる実をイメージして、専門科目の『ビジネス』『情報』『フード』『ファッション』『インテリア』『健康・ビューティ』『ブライダル』『観光』の８つのフィールドを配しています。各科目は、知識を理論的に学び、それらを実践的な演習・実習により定着させ、さらに学びの集大成として各種資格を取得できるように開講します。

② ライフデザイン学科の学びを表す概念図（ライフデザインMapping）の創生

ライフデザインMappingは、2022年にライフデザイン学科に名称変更する際に新たなビジョンを表現するツールとして考案された（図８）。

ライフデザインMappingでは、学生の主体性を育む教育として学生を象徴するセイラちゃんを中央に配置し、その周囲に８フィールドの学びを放射状に配置した。この配置は学生自らが軸となり、化学結合のように８フィールドの学びを結合させていくようなイメージで作成した。本概念図は学生が主体的に学びを取り入れて、自らの知識・技能を放射状に拡張させていくことと、個人とライフデザインの学びが結合することによって、新たな自分へと変化していく様子を示している。さらに、学びを結合した学生が核となり球体を形作っている。この球体は、私たちが暮らす地球を模しており、地層は家庭・地域・社会の３層で構成されている。ライフデザイン学科で得た知識と技能、学びの実践によって、身近な生活環境から段階を経て社会に接続され、社会の土壌を形成していることを３層の地層で示唆している。球面に描かれた人々や植物、建造物は核である学生から一見遠い場所に存在しているように見えるが、ライフデザインの学びが生活に関わるものの土台になっていることを暗示している。人や植物の成長、一軒の家から高層ビル街に発展する様子は、将来にわたり豊かな人生を築くための学びあるライフデザイン学の時間軸を表している。更に言えば、この時間軸は個人の一生にとどまるものではなく、現在が過去からの歴史を受け継いだものであり、また特に地球環境において未来世代への責任を負うものであることも含ませている。

図８　ライフデザインMapping

以下に、ライフデザイン学科のカリキュラムポリシーを示す。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

ライフデザイン学科は、知識・技能を活用しながら学びの視野を広げ、問題を解決する力（ジェネリックスキル）と資格取得をとおして各分野の学びを深める力（スペシャリスト）の育成を基本的な考えとしています。教育課程の編成と実施については、建学の理念を土壌に、基幹科目として「ライフデザインゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱ」「キャリアデザイニング」「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」を配し、社会で求められる基礎学力やデータ処理能力を身につけます。その上で、専門科目として『ビジネス・ICT』『医療事務』『フード』『ファッション』『インテリア』『トータルビューティ』『ブライダル』『グローバルカルチャー』の８フィールドの各科目を開講し理論的な知識を学び、実践的な実習・演習によって知識・技術を定着させ、さらに各種資格取得で学びを深めます。また同時に、地域連携活動を主としたプロジェクト型学習で知識・技能を活かし広げる教育を実施します。

（３）概念図活用の結果

ライフデザイン学科１期生は、必修科目「ライフデザイン概論」において、ライフデザインMappingを参照し、ライフデザイン学科での学びについて考える時間を２回もった（１回目：2022年５月13日、２回目：2022年５月27日）。１回目の授業は、ライフデザイン学科における学びについての問題提起を行い、提出用紙から得られた個人回答を集約して２回目の授業で学生の個人回答を共有した。ワークショップ形式にはせずに、個人ワークで実施したのは、ライフデザイン学科の学生観として、人間関係が希薄な中で自分の意見を表現することが苦手な傾向があるためである。なお、記述内容は自由意志に委ねられており、結果については全体的なふりかえりとして次回授業等で共有することを担当教員より学生へ口頭で説明した。

１回目の授業では､｢ライフデザインとは何か？｣という真髄に迫る大きな質問を投げかけた。前述の通り、宮田らがライフデザインについて定義づけを行っている[3)]他、明確な定義づけは見られず、その捉え方は様々である。そこで、ライフデザイン学科の学生のためのライフデザインの定義を学生とともに探る取り組みを行った。ライフには、生活、人生、いのちといった意味がある[8)]。また、goo辞書によるとデザインはラテン語の動詞designareに由来し、骨組みを作る、工夫する、目的を持って具体的に立案・設計するといった意味をもつ。では、２つの言葉を組み合わせたライフデザインとは、どのような意味なのであろう。「なりたい自分を探そう！」と掲げて始動した生活ナビゲーション学科に続く、ライフデザイン学科のキャッチフレーズを探る必要があった。そこで、「よりよい生活（人生）を送るために、私たちはどの方向を向いてどこをめざせばよいのだろう？」と言葉を置き換え、さらに検討を進めた。

WHO（世界保健機関）憲章による健康の定義において、「健康とは、単に病気や虚弱の状態ではないということだけではなく、身体的・精神的及び社会的に良好な状態」と表現している[9)]。また、内閣府は、「主観的幸福感」の上位概念として、①経済社会状況（制度、子育て・教育、住環境、仕事)、②心身の健康、③関係性（個人、家族、地域社会、自然）を３本柱として指標としている[10)]。さらに、内閣府の国民生活に関する世論調査では、国民の62％が物質的な豊かさより、心の豊かさやゆとりのある生活を重視しているというデータを示している[10)]。そして、その傾向は、男性より女性、若齢者より高齢者の方が強い。そこで、ライフデザイン学科の学生にとってのよりよい生活（人生）を探るために、内閣府の質問に基づき、「物質的にはある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」(以下、心の豊かさ)、「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」(以下、モノの豊かさ）として質問項目を設定した。その結果は、次の通り、２回目の授業にて学生と共有した。心の豊かさとモノの豊かさではどちらの方を重視するか、そのバランスについて学生に問うた結果、図９の通り、学生は心の豊かさ60％：モノの豊かさ40％のバランスを求めていることがわかった。この結果は、内閣府の示す18－29歳の回答結果[10)]より、やや心の豊かさの割合が

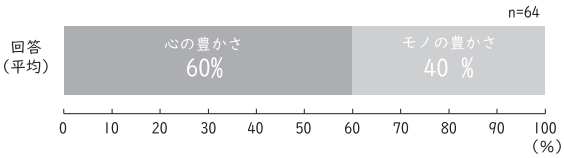

図９　学生が求める「心の豊かさとモノの豊かさ」のバランス（平均）

高い結果であった。さらに、学生の回答の内訳を図10に示す。心の豊かさ：モノの豊かさのバランスを60％：40％と回答した学生の数が最も多く、次いで、70％：30％、50％：50％と続く。しかし、心の豊かさよりモノの豊かさを求める回答（20％：80％）やモノの豊かさより心の豊かさを求める回答（90％：10％）もみられた。回答にはバラツキがあり、心の豊かさとモノの豊かさのバランスのもちかたについては個人差があることがわかる。さらに、「よりよい生活（人生）とは何か？」についての自由記述により得られた語句の出現回数をKH coder 3を用い、算出した。その結果、出現回数の多い順に「お金」(38回)、「生活」(18回)、「友達」(18回)、「自分」(17回)となった。これらの３つの抽出語が用いられた記述を表１に示す。「お金」と答えた学生は、自分でお金を稼いで使う、貯めると挙げていた。「生活」と答えた学生は、自分の好きなことができる生活を送りたい、充実した学校生活を送りたいなどを挙げていた。「友達」と答えた学生は、友達と充実した毎日を送る、充実した時間を送れる友達をつくる、友達といっぱい思い出をつくるなどを挙げていた。「自分」と答えた学生は、自分の好きなことをする、自分に自信をつけて、自己肯定感をあげるなどが挙げられた。これらの思いがどの程度あるのか、またこれらの関連性について確認するため、共起ネットワークで表したものを図11に示す。

この図は、丸が大きいほど、出現回数の多かった言葉であり、関連が強い抽出語は近くに配置される。また、線の太さは関連の強さを示す。この図から、学生にとって、アルバイトでお金を稼いで貯めること、好きなものを買うこと、友達とたくさ

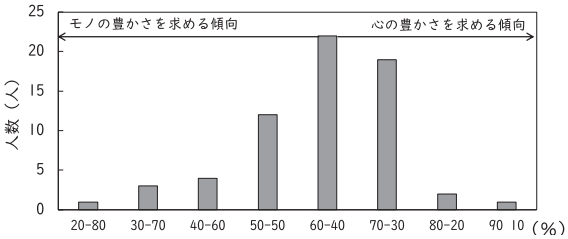

図10　学生が求める「心の豊かさとモノの豊かさ」の内訳

表１　抽出語が用いられた記述

抽出語	学生コメント
お金	• 仕事をして**お金**を稼いで、好きなものにお金を使う。 • アルバイトをして**お金**を貯める。 • **お金**の使い方の改善する。 • **お金**を無駄遣いをしない。
生活	• 自分の好きなことができる**生活。** • 友達、学校**生活**をもっと充実させる。 • 充実した学生**生活。** • 健康的な**生活。**
友達	• 充実した時間を送れる趣味や**友達**をつくる。 • **友達**がたくさんいて、充実した毎日を送る。 • **友達**といっぱい思い出をつくる。
自分	• **自分**の好きなことをする。 • **自分**のなりたいものになる。 • **自分**がしたいことを**自分**らしく発揮させる。 • **自分**に自信をつけて、自己肯定感をあげる。

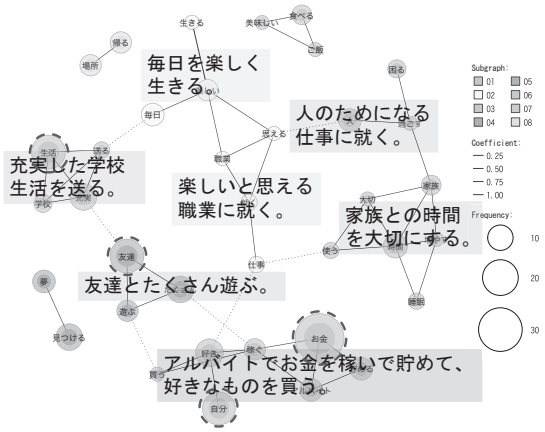

図11
学生が求めるよりよい生活（人生）についての自由記述から得られた抽出語の関連性

ん遊ぶこと、充実した学校生活を送ることなどがよりよい生活（人生）であると窺い知ることができた。また、毎日を楽しく生きたい気持ちや、楽しいと思える職業に就きたいという願望や就職観もみえてきた。一方で、学生なりに、仕事に就くということは、自分のことだけでなく人のためという社会的役割への意識も芽生えており、だからこそ、学生のうちは自分のために充実した学生生活を送りたい気持ちが大きく表れていたものと考える。このことから、よりよい生活（人生）とは何か？を考える際には職業観も含め、少し先の人生も見据えた今の自分の生活を考えることが、学生にとって心の安定につながるものと考える。しかし、上述の通り、心の豊かさとモノの豊かさを重視するバランスは年齢や性別、個人により異なることが明らかになっており、学生が考えるよりよい生活（人生）の答えも、時間や経験を重ねる中で、今後変化していくものと推察する。そのために、自分の人生のライフステージやライフスタイルが変化するたび、自分にとって、よりよい生活、幸せな人生とは何か、自分なりのライフデザインを描き続ける力が大事になってくるのだろう。つまり、ライフデザイン学科での学びのビジョンは、自分自身の成長を他者との関係の中で広げ、空間的な広がりと時間的な経過を通して、より良い生活の向上（well-being）を実現することだといえる。そしてそれは、知識と経験の蓄積と共に変化し続けるものであり、個人差もある。ライフデザイン学科は、多彩な学びを展開し、めざす方向性が異なる多様な学生と異分野の教員が協働している学科である。そのため、学科の概念図を学びの核として掲げ、学生・教員ともに学び合いながらwell-beingの向上に向けて考え歩み続けることが大切である。そして、教員にとっても学科の概念図は、学科のビジョンを描き続ける上で重要な地図なのである。

４．今後の展望

本学科は、８フィールドが独立した柱として単に林立しているイメージではなく、多様なフィールドおよび専門性をもつ教員が配置されているため、教員間や学生間でフィールド間の協働による新たな企画立案・遂行も可能であることが強みである。しかし、フィールドが多彩であるからこそ、各分野との関連性や学びの方向性を示すのは容易ではない。今後は、学科の学びを表す概念図が学修内容に即したものになっているか、また、概念図が学生の学びを導くものになっているのかについて効果検証をする必要がある。

ライフデザイン学科では、大学内外の機関・企業との連携を強化し、独自性のあるコンテンツを積極的に探究しながら、学生の社会実装の機会を増やしたいと考えている。連携企業とのインターンシップ実施や就職先としての候補にしていくなど、学びにおける連携企業が進路の選択肢のひとつとしてつながり、学生が無理なく積極的に就職へのイメージを広げ、自らのライフプランを描くことのできるような教育活動を推進していきたい。

あとがき

本稿は、第１項、第２項（１）、第３項（１）,（３）は谷明日香、第２項（２）は谷口美佳、谷明日香、第３項（２）①は森山廣美、谷明日香、第３項（２）②および第４項は西晃平が執筆した。

付　記

論文中の図３および写真掲載については、許可を得ている。

参考文献

１）文部科学省：“地域総合学科とは”. https：//www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/04031902.htm,（参照 2022.5.20）

２）中央教育審議会大学分科会：“大学教育部会短期大学WG（第４回）地域総合科学科について”.2014. https：//www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo ４/037/siryo/__icsFiles/afieldfile/2014/05/15/1347701_５_3.pdf,（参照 2022.05.20）

３）宮田安彦, 小澤千穂子（2005）「ライフデザイン学の構想-21世紀社会で求められる家政学をめざして-」『家政学原論研究』, No.39, pp.31-41.

４）文部科学省：“2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）（中教審第211号）”.https：//www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo ０/toushin/1411360.htm,（参照 2022.05.20）

５）谷明日香，葭矢峰世（2018）「分野間連携による学修効果促進のための取り組み－第10回ヘアメイク選手権への挑戦－」『四天王寺大学教育研究実践論集』, 第５号, pp.97-105.

６）谷明日香（2018）「羽曳野ぶどうの皮を用いた染色衣装によるファッションショーの取り組みと学生の学修効果」『四天王寺大学教育研究実践論集』，第６号, pp.47-58.

７）櫻田潤（2013）『たのしいインフォグラフィック入門』, ビー・エヌ・エヌ・新社, pp.11-12.

８）宮田安彦（2020）『ライフデザイン学概論』改訂新版,株式会社日本教育訓練センター , pp.28-29.

９）公益社団法人日本WHO協会：“世界保健機関（WHO）憲章とは”,https：//japan-who.or.jp/about/who-what/charter/,（参照 2023.03.30）

10）内閣府：“国民生活に関する世論調査”.2019.https：//survey.gov-online.go.jp/r01/index-r01.html,（参照 2023.03.30）